# 夕顔の巻における美の構造

竹原崇雄

## 一

夕顔ははかなくこの世を去った。はかなく絶えることが、自らに課せられた宿命であったかのように、何の思いを述べるでもなく世を去った。中の品の女としての身分でありながら、高貴な源氏に求められるまま、空蟬とは逆に、その身を委ねていったのも、自らのはかない運命を無意識の底に知っていたからではなかったか。身を委ねつつ絶えることが、平安時代における弱い立場の女性の、せめてもの男に対する抵抗の姿勢を示すものであったとの解釈もできぬではない。貴族社会の中において、落魄した中の品の女の占める位置がいかなるものであったか、物語の作者は十分に心得ていた。空蟬が源氏に①ひかれつつ頑なに拒んだのも、増田繁夫氏が説かれるように、「品足まりぬる身」②（「帚木」P228）という意識も強かったであろうが、「際」（「帚木」P220）という表現で示されている中の品の女としての身分に対する意識が、その結果のみじめさを予知していたということもまた考えられるのである。哀しい運命の影を無意識の底に潜ませている女の醸す気配が、この夕顔物語の表面に浮いているのを感ずる。それは、ほの白く浮ぶ夕顔の花が、薄命の哀しさを楚々とした美しさの陰に漂わせている様と等しい雰囲気を伴ってその世界を構成しているのである。

先学によってつとに指摘されているように、この白い花と女との相互関係が、この巻の基調をなしていると思われる。白い花の中に女は漂い、女の背後に白い花の影は常に揺曳する。夕顔の花の白さは、その楚々たる女の美しさを暗示するとともに、薄幸の運命を象徴するものでもあった。「くちをしの花の契や」（P243）と詠嘆する源氏の言葉には、「不運な女」を暗喩する響きが感ぜられるのである。この二重映しの美こそ、作者紫式部が狙った「夕顔」の物語の世界の核を構成するものであると考えるのである。

以上述べてきた二重映しの手法は、夕顔の女の美の形象化のみに見られるのではなく、物語の構造、文章の構成の中にも見てとれる。これは、「螢」で展開する物語論によ

って、「いつはり」「そらごと」と「まこと」とを対照させ、その狭間に感動的な物語世界を構想するという方法を説く式部の基本的な物語に対する姿勢と無縁のものではない。六条御息所の生霊の不透明な性格も、不透明であるが故に無気味な雰囲気を醸していることを考えると、これも作者の狙った構想であったと考えられる。廃院に棲む物の怪か生霊かという二重性の中に夕顔の死の美が効果的に位置づけられている。「帚木」において忽然と頭中将の前から姿を消した常夏の女が、「夕顔」において幻のごとく再生したのも、二重映しの美の効果を狙ったものと解釈できるであろう。殊に「夕顔」全篇を覆う漂々としたはかない色調は、「そらごと」でもなく、「まこと」でもない、落魄した中の品の女と若き貴公子との出会いを描いたものであった。夕顔の死後、源氏が女と過した日々を回想して「あらぬ世によみがへりたるやうに」（P279）と言っているのは、まさに、その世界が現実でありながら、非現実の色調を帯びていたことを語っているものであった。病癒えた源氏が生きている世が「あらぬ世」であり、女と共に過した世が「あらぬ世」ならざるまことの世であったということになる。この現実の世と、いわゆる「あらぬ世」との狭間に、「夕顔」の美的世界は構成されていたのであった。夕顔の女と頭中将が語る常夏の女との関係の不透明さも、すべて「夕顔」一篇を覆う巻そのものの性格と必然的に結びついた構想の所産であったと解し得るのである。この二重性が「夕顔」冒頭の部分とどのような関係を持ち、どのように構成されているか、考えてみたいと思うのである。

## 二

「夕顔」は女の宿とその前に佇む源氏の描写に始まる

A門は蔀のやうなる、押しあげたる、見いれの程なく、ものはかなき住を、あはれに、B何処かさして、と思ほしなせば、玉の台も同じことなり。きりかけだつ物に、いと青やかなる葛の、心地よげに、蔓ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑の眉開けたる。「遠方人に物申す」と、ひとりごち給ふを、御随身つい居て、「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ、咲き侍りける。」と申す。Aげにいと小家がちに、むづかしげなるわたりの、このもかのも、あやしくうちよろぼひて、Bむねむねしからぬ軒のつまなどに、蔓ひまつはれたるを、「くちをしの花の契や。一ふさ折りて参れ」と宣へば、この押しあけたる門に入りて折る。さすがにざれたる遣戸口に、黄なる生絹の単袴、長く着なしたる童の、をかしげなる、出で来て、うち招く。白き扇の、いたうこがしたるを、「これに置きて参らせよ。枝もなさけなげなめる花を」とて、取らせたれば、門あけて惟光の朝臣出で来たるして、奉らす。「鍵を置き惑し侍りて、いと不便なるわざなりや。A物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまして」と、かしこまり申す。（P242－P243）

右引用の文章の構成は、傍線部Aの宿を中心としたみすぼらしい周囲の情景と、Bの夕顔の花に関係する描写とが、交互に配列された形態となっている。住居とそれに蔓いまつわる夕顔を描写し、傍に佇む源氏の住む世界とは大きく隔たった別の世界を描きあげている。宿と夕顔とは解け難く結びつき、異なった性格を示しつつ一つの世界を形成している。

AとBとを比較対照してみれば、住居を中心とした描写のわびしげなのに対して、花に関係する描写は、その美しさの点において際だつものとして特徴づけられていることに注意される。「おのれひとり」という表現は、陋巷の「ものはかなき住」に咲く「白き花」の「ひとり」際だつ美しさを明らかに示して「笑の眉開く」晴れ晴れとした花の世界を強調する。夕顔の白の美しさは「青やかなる」「心地よげに」と瑞々しい情感溢れる描写に導かれて、「青」との対照の中で浮きたち、ふと目をとめた源氏の心をひかずにはいなかった。「遠方人に物申す」という『古今集』を引歌とする言葉は、自ずから口をついて出た感嘆の響きを伴って、貴族的世界から解放されて花の世界に同化する源氏の心のリズムを表現するものであった。「何処かさして」と気ままな源氏の心は、花の宿を「玉の台」としてみる風流な浮きたつ遊び心に色どられている。「花の名は人めきて」は、「白き花」の美的情調を承けると同時に「あやしき垣根」によって限どられて浮きたち、以下に連続する「小家がち」「むづかしげなるわたり」「うちよろぼひ」「むねむねしからぬ」といった表現との対照の中で却って浄化されつつ「くちをしの花の契」と詠嘆する源氏の心情を構成する主要素の中に流れ込んでいる。源氏の心は明らかに「あやしき垣根」に咲く「人」めいた花に傾いている。「くち惜し」は否定的感情を表現しているものではなく、軽い抵抗感を抱きつつも共感を以て傾斜する心の情態を描いていると解釈できよう。「枝もなさけなげなめる花」と言って扇をさし出す童の姿も、前に位置する「ざれたる遣戸口」、「黄なる生絹」、「白き扇」という風流な背景の描写によって、花の美しさを謙虚に示しつつ「らうがはしき大路」との調和をはかっている。

以上のように考えてくると、Aの住いの様とBの花とは対照的に描かれていると同時に、この対照は、一方が他を否定するという関係にあるのではない。陋巷にあって、花はその美しさを際だたせているとともに、住いと融合しつつ調和的世界の美を構成するものとなっている。「花」は「あやしき垣根」を離れては存し得ないものであった。だからこそ「くちをしの花の契や」と詠嘆する源氏の心情も生れてくるのである。

夕顔の花については、「枕草子」に次のように述べてある。

夕顔は、花のかたちも朝顔に似て、いひつづけたるに、いとをかしかりぬべき花の姿に、実のありさまこそ、いとくちをしけれ。などさはた生ひ出でけん。ぬかづきなどいふもののやうにだにあれかし。されど、なほ夕顔と

いふ名ばかりはをかし。（六七段・『日本古典文学大系』P106）

ここでは、「夕顔といふ名」に寄せる共感が「朝顔」「夕顔」と連続して表現する語調の面白みをも加えて、「をかしかりぬべき花の姿」との連想の中で示されるとともに、「くちをし」き「実」の恰好から、いかんともし難いその「生ひ出で」を残念がっている。このように解釈すると、清少納言の夕顔の花に寄せる感想にもまた、「夕顔」における花の描写の方法とある面において共通している点を見出し得るのである。当時において、貴族的な興味に適う花であったとは言い難い。従って、源氏がその花にひかれた気持も、周囲の情景から画然と際だつ美に魅せられたものではあるまい。却って、その花の美しさは「ものはかなき住」「あやしき垣根」などにあってこそ、際だつものであったのではなかったか。「笑の眉ひらけたる」という描写は、周囲の情景と調和しつつ、己れの存在を静かに示す柔らかな美しさに満ちている。孝標の女が『更級日記』の上洛の記で述べているような、山中の葵を見て京を感じたものとは全く別個の感情において、源氏はその白い花をとらえたのであった。所詮、夕顔は葵ではなかった。

夕顔の花咲く宿のあたりの情景と、その花影の描写とは、互いに対応する性格をもって位置しつつ、両者は対立する否定的関係に立つものではなかった。異なった性格を示しつつも、共通の地盤に立つという二重性の中で描かれているものであった。それが「花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ、咲き侍りける」という表現の核なのである。

三

以上述べてきた、花と住いとそこを訪れた源氏との関係を、花を女に置きかえて、女と住いと源氏との関係において描写したのが次の一節である。

八月十五夜、隈なき月影、隙多かる板屋のこりなく漏り来て、見ならひ給はぬ住の様もめづらしきに、暁近くなりにけるなるべし。隣の家々、あやしき賤の男の声々、目さまして、「あはれ、いと寒しや。今年こそなりはひにも頼む所少く、田舎の通も思ひかけねば、いと心細けれ。北殿こそ、聞き給ふや」など、言ひ交すも聞ゆ。Aいとあはれなるおのがじしの営みに、起き出でてそそめき騒ぐも程なきを、女いとはづかしく思ひたり。Bえんだち気色ばまむ人は、消えも入りぬべき住のさまなめりかし。Cされどのどかに、つらきも憂きもかたはらいたきことも、思ひ入れたる様ならで、わがもてなし有様は、いとあてはかに児めかしくて、Dまたなくらうがはしき隣の用意なさをいかなる事とも聞き知りたる様ならねば、Eなかなか恥ぢかかやかむよりは、罪ゆるされてぞ見えける。（P258－P259）

明るい仲秋の月の下の心細い人々の生活。おっとりとした女の姿、以上の二つの情景が右の文章の構成要素となっている。前に考察した「ものはかなき住居」の有様を、そこで生活する人々の息づかいまで感ずることができるよう

に描きあげた文章となっている。ここには、窮乏の底にうごめくはかない生活がある。「あやしき賤の男」の頼りなげな声の底には、生活の不安を超えた諦めのわびしさにも似たものが漂って、その「営み」の哀しさを深めている。「むねむねしからぬのきの下」、「あやしき垣根」の内の生活は、かかる窮乏にとざされたものであった。源氏にとっては未だ経験せぬ別の世界である。女はここに生きていた。

しかし、女は男に対してその生活のみじめさを格別に意識している風でもなかった。

ここで解釈上問題になるのは、傍線Aの部分において、隣人の「そそめき騒ぐ」声が聞こえてくるのを、女は「はづかしく思ひたり」と記し、傍線Eにおいて「なかなか恥ぢかかやかんよりは、罪ゆるされてぞ見えける」となっていて、AとEの表現内容が矛盾していると指摘されていることである。しかし、この矛盾は、BとEの意味の対応を詳細に比較すると解消していく性質のものである。即ち、Bにおいて「えんだち気色ばまむ人は、消えも入りぬべき住のさま」と記され、Aの「はづかし」という感情を抱く夕顔の女とは異なった感情で「住」を受け入れている。「えんだち気色ばまむ人」は、夕顔が「はづかし」と思っている「住」の状態を一段と強調し、夕顔の感情の穏やかさを表現するために仮定された人物であった。従って、夕顔を描いたAの「はづかしく思ひたり」という表現は、仮定された女を描くBの表現に比較して、その程度は非常に弱く表現されていることになる。この場合と同様に、Eの「恥ぢかかやかむ」というのも、Dの夕顔を描写した「いかなる事とも聞き知りたる様ならねば」と逆の意味において対応している。しかも、「恥ぢかかやかむ」というのは、外からみて、恥ずかしさに赤面していることが明確に把握できる状態の表現であって、これは、Bの「えんだち気色ばまむ人」に類する人物を仮定して、夕顔の女の比較の対象として文中に挿入したものであった。DとEの文の構成は、AとBの文の構成と共通している。その点、「恥づかしく」と「恥ぢかかやかむ」とは、共通する要素はすくなく、前者は、夕顔の静かな内面の心理を描き、後者は、仮定された人物（夕顔であったとしても、その場合は仮定された状態）の誇張された状態を表現しているものと解される。従って「Aであるが故にEはおかしい」という論理は成立しない。むしろ、BがAの比較の対象としての意味を持つと同様の役割を、EはDに対して持っているに過ぎないものと理解してさしつかえないのではなかろうか。こう考えてくると、Eの「恥ぢかかやむ」が対応している表現は、Bの「消えも入りぬべき」であって、AとEとは文脈の上でのつながりはないことになる。

それに対して、Aの「恥づかしく思ひたり」とDの「いかなる事とも聞き知りたる様ならねば」とは密接なつながりのあるのは否定できない。今井源衛氏は、これについて次のように述べておられる。③

「女いと恥づかしく思ひたり」は「聞き知りたるさま

ならねば」と一見矛盾するが、前者は女の心中に即して述べ、後者は源氏の目に映じた女の姿である。

更に「内心を外に現わさない」女としての描写を意図していると述べられる。

ここで、再びAの表現から辿ってみる。AとBとの関係は、Aの夕顔の女よりBの仮定された人物の方が、激しい感情の持主であるということを示し、夕顔の女の「はづかしく」という心情表現に対し、Bは「消えも入りぬべき」とその差を示している。Cの「されど」は、それに続く「のどかに」以下Cの部分を含めてDの「聞き知りたる様ならねば」までの内容を支配しているものと考えられる。その中心となっている部分は、「はづかしく思ひたり」「されど」「聞き知りたる様ならねば」と文脈は辿られるのである。その間に含まれる「のどかに」から「児めかしくて」までは、この場での具体的な描写よりも、一般的外面的描写に近く、この女のこのような一般性から、Dの「またなくらうがはしき隣の用意なさ」という具体的事実に対する女の反応を「いかなる事とも聞き知りたる様ならねば」と帰納しているのではなかろうかと推定するのである。従って、女は、内心その住いに対して男の手前「恥づかしく」思ってはいるが、さして思い込む性質でもなく、いかにも子供っぽくて、外見さして気にとめている様子でもない、という解釈で文脈を辿れば、Aの「恥づかしく」という表現と矛盾と言うべき程の表現の断層はあまり強くは浮いてこないのである。この「されど」によってつながれている「恥づかしく思ひたり」と「いかなる事とも聞き知りたる様ならねば」との関係を、今井氏の説かれる「女の心中」と「源氏の目に映じた女の姿」と解した場合も同様の結果になってくる。

ともあれ、その住いのさまは、気取る女であるならば、「消えも入りぬべき住のさま」であるにもかかわらず、女は「のどか」な態度の中で、「いかなる事とも」思っている様には見えなかった。以上のように解釈してこそ、あの冒頭の夕顔の花の姿を見ることができる。周囲の「らうがはしき」状態に染むことなく、といって背むこともなく、自然の様の中で己れの存在を確保していたあの優しげな花の影がここにはあった。

右に引用した描写に続いて、その住居の状態に対して不快の念を示す源氏が描かれる。「碓の音」も聞き馴れぬ音であって、「耳かしがまし」のみである。しかし、源氏は次第にその世界の情趣に身を浸していく。女と共に眺めた前栽の露の美しさは、源氏の心に、その住いに生きる女と共通の感情を導いていた。住いの様に対して抱いた源氏の不快の念は、前栽の露を軸として、肯定的な感情に移行する。それは「御志一つの浅からぬ」（P258）思いに基くものではあったが、一風変った情景に却って興趣をそそられ、「よろづの罪ゆるさるる」（P258）と同化していく姿を描写する。このような源氏の心情の傾斜の中で描き出された「はなやかならぬ」「そこと取り立ててすぐれたる事もない「たをたをと」した女の姿に、源氏は「ただいとらうた

く見ゆ」とひかれていく自らの感情を抑えることはできなかった。前に考察した住いのさまの描写の部分に於て「らうがはしき隣」に対して「罪ゆるされて」見えたのも、女の「思ひ入れたる様ならで」「いとあてはかに児めかし」き態度からであった。

ここに描き出された女の姿に「花の夕顔」を重ねてみることは可能である。「見ならひ給はぬ住の様」、「あやしき賤の男」、「蟋蟀」の声、すべては夕顔の花をとり巻く自然の姿に他ならない。夕顔の女が、内心では、その住いに対して「恥づかしく」思ってはいても、「いかなる事とも聞き知りたる様」ではない状態でいると同様に、夕顔の花もまた、「ものはかなき住」「あやしき垣根」に「白き花ぞ、おのれひとり」美しくその花を開かせているのであった。白い「夕顔」は、ここでは「はなやかならぬ」「ほそやかにたをたをとした」女の姿となって再生している。女の姿の背後に、ゆらめく花の影を感ずるのである。二重映しの美の効果はここにおいて生きている。女は花と重なり、白くはかない花の影にたゆとうている。花が萎れる時、女もその運命を共にするべく予感させているのであった。ここに、「夕顔」における美の構造の手法を見ることができるのである。

〔注〕

(1) 増田繁夫氏「品定まれる人、空蟬」(講座『源氏物語の世界』第一集)
「空蟬と夕顔ー処生のかしこさとつたなさ—」(『源氏物語の探究』第五輯 風間書房)

(2) 引用本文は『日本古典全書源氏物語一』(朝日新聞社)による。傍線等の記号は筆者による。「夕顔」については巻名は省略した。

(3) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』頭注(『日本古典文学全集』小学館)